

調鍊學院(左)
金谷御祭所(右)

京城

第五版

奉送故李太王靈柩

故大勳位李太王殿下晏駕の後、早くも三十餘日を閑したるが、其間政府は案を具して帝國議會の協賛を経、國葬の儀を以て故殿下の靈柩を奉送するの議を決し、其執行に關するの官吏を任命し、特に聖上に於かせられては、故殿下の生涯を顧念したまひ、勅使を差遣して優渥の御詠を賜ひたるのみならず、儀式に參列する陸海軍にも、特に敬慮を費させたまひたるは、從來の慣例に比し、一層優遇を明かにしたまへるものにして、日本帝國に於ける無前の國葬たる言を俟たず。朝鮮在來の臣民たるも、朝鮮居住の内地人たるを問はず、宜しく最敬最慎の態度を以て、奉送の誠意を表するなかるべからず。惟ふに故殿下の御生涯は洵に波瀾曲折に富みたりき、而も權域に君臨すること四十餘年、時代の趨勢も、國運の變る所を察し、國位を李王殿下に譲り、風塵の外に高踏し、悠然として天壽を德壽宮に養はれたるは、其御一身に取りては、明哲保身の古格言に遵據せられ、又朝鮮全域に取りては、爰に新時代に適應して、進歩發達の源を啓かれたるものにして、大勇猛心と大精進心とを具有するにあらずんば、安ぞ克く此に至らんや。

歳の三月三日、習々たる谷風、猶玄氷の餘威を帯び、哀歌雲を遏め、彩幡遅々として進まず、追遠哀慕、道塗皆涙を垂る。伏して祝す、靈輿因山の後、殿廟長へに響く、陵寢永く固く、故殿下在天の英靈、赫々照臨、以て王家の子孫を護し、山河と共に渝はることなからんことを。謹みて一辭を載せ以て奉送す。

墓より國葬へ

○廿一日 李太王陛下は午前十一時
 四十五分突然御病増進御眞症にて
 御重患の趣、李王職より報告あり
 ▲午前六時半分李王御妃殿下下
 宮内に成らせらる。李王嬪公同妃
 殿下以下御親戚、山縣宮等御親
 御見舞はれ如し。李王職より王
 親王邸へ急心を致す
 ○廿二日 王世子殿下と製本宮方
 下殿下、この御座るは一年に
 の通資致る。▲天皇皇后陛下
 より御舞舞として、葡萄酒一、三杯
 下賜の旨御沙汰あり
 ○廿三日 李王陛下廿一日午前
 六時迄に親方の呂李王職より資致
 り舞宴、深く御盛會をなされ盛情の
 趣、
 ○廿四日 李王陛下は御病増進
 御眞症にて、御重患の趣、李王職
 より報告あり
 ○廿五日 李王陛下は御病増進
 御眞症にて、御重患の趣、李王職
 より報告あり
 ○廿六日 李王陛下は御病増進
 御眞症にて、御重患の趣、李王職
 より報告あり
 ○廿七日 李王陛下は御病増進
 御眞症にて、御重患の趣、李王職
 より報告あり
 ○廿八日 李王陛下は御病増進
 御眞症にて、御重患の趣、李王職
 より報告あり
 ○廿九日 李王陛下は御病増進
 御眞症にて、御重患の趣、李王職
 より報告あり
 ○三十日 李王陛下は御病増進
 御眞症にて、御重患の趣、李王職
 より報告あり

故李太王殿下の御肖像

我國の近代思潮(本社主催講演會に於て)

長瀧智大師講演

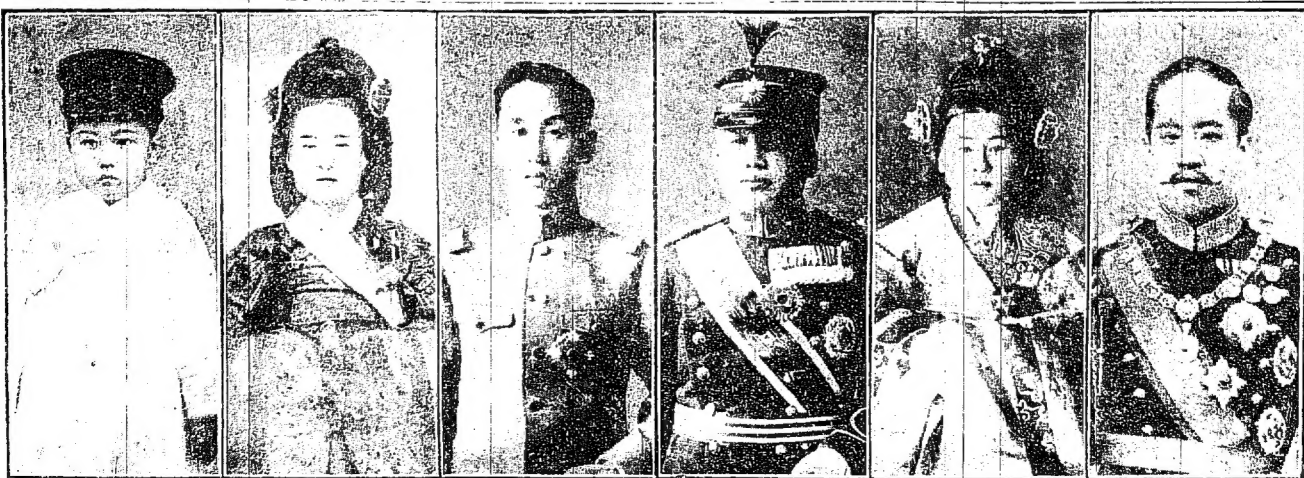
國民の思想の上で八幡に就ては、
茶蘇麻羅の譯の上で八幡に就ては、
れて居るから従つて近代思潮或
は思ふ思潮なるもの、内容に就て
今敢つて詳説するに及ばざるを
夫れで茲には唯特に吾々の國
の世界に對する我國
近代思潮に對するもの

李王家御一族
(右より) 喪主李玉、同妃、王世子、李瑄公、同妃、李鎬公各殿下

代の思想でも過去の思想でもそれ



古賀祐雄謹寫



李王家御一族
(右より) 喪主李玉、同妃、王世子、李瑄公、同妃、李鎬公各殿下

に就て旅路を遠く見ようと思へば、デモクラシーの思想は世かの潮流なるかに受入れられる。然し先づ一般の人は日本も東洋世界の中國の一國であらから此近き思想の潮流に反抗する。これは神聖出来ない大敵と將に迎へんとする時一木の以て支ふことの出来ぬやうな困難何うして克服し潮に順應しないとはなぬと考へて居るかの如くである。是は一變じもの語である。同じ世界に隨つて居る以上各處歩調を共にせし文明の光澤に海人は爲めに其共通の思想の上におきて手を携へて進まなくてはならぬ。苟くも人間に對つて無動靜があるのがあれば西洋人が驚かしうが東方の土人の考察に當らうか遠慮には及ばないまでに夫を敢て利用厚生を図るべきである。昔の人は貧窮自給の觀を得る馬鹿があらうか。

さてれば、存亡可虞は世の常のことであるから現國々界に類ひ置かれて一島國として受けねば宜い。さうしてデモクラシーは世界思想だから日本も是に順應すべきでは當り前の話である。然し徳がデモクラシーに降参して仕舞つたら宜い筈しながら日本は世界を斯く支配したならば如何であらうか否論が已斯く發露するに至らない。

この如き。若しどうでなくとも聯合には人間が現今の世界状態を神の前に跪け出し雙方が此の世界をお互に惹きつけた方の御座いますか。それにしては何故つまずいたか。立派な世界をお送り下さりながらそれで御座いますか。抵抗を命ぜられた時に、神に人間の説教に對して答辯が出来ないで逃げ退かなくてはならぬことになる。斯くの事柄ならチリガ付く。神聖な度にもならない。此種聯合に神人間に對して俺が造つたのは並重な世界であつた。世界の前途に何等希望に睨み居る暇がなければならぬ俺が俺の約束を守らずに何か折角俺が苦心して造つた世界を斯く破壊したならば如何であらうか否論が已斯く發露するに至らない。

（右の人物像は、明治時代の政治家・思想家である高橋是清の肖像画と推定される。）

奇遇 (二)

から長嘆息を絞り出すには
なかつた。

A black and white photograph showing two men in an indoor setting. On the left, a man with glasses and a mustache, wearing a light-colored jacket, is seated at a table. On the right, a man in a dark, heavy coat is seated on the floor, facing the man at the table. The room has a textured wall and a small table with a bottle and a cup.

和樂 (下)

●色々研究した尺八を
試みに尺八に就て研究「カケザメ」
を第一の主題とし「ビノコ」を第二
として洋式の装ひを用ひ、リズムと結
合し合奏をして見た處、即特待下
の好結果を得られなば日本人に
せん更張

これ、幾分は思はず、却てて親余
の演説に生、活氣を思ひ出し、再び
演説に立ち、余とももあること
な事です。但し、愛樂家の間の教育が大
切であるの思はずにはあらねま
せん更張

も附いた尚ほ尺八の外に銅鑼、土魚大ツリ等も和洋調和樂の材料として研究して見ることが是れも可なり

好い結果を得て既に五六の作品を
 出来た又諸國に行はれて居る民謡
 童謡傳習會の中にも好い材料が少
 からずあるやう私は旅の終があつ
 て順路に訪ねた遊ぶでの細心の注
 意を要する事だと思ふ

だしく汗が出来る汚れた
 仕事をする人など限り
 居る入る必要はないので
 中へは必ず入ら
 ず三日に一回は必ず入ら
 ず身置を済ます必要のない事
 はいふ迄もない

中には又例へば

◆**參勤交替** さんきんこうぎ の道中みちうちなご
事を追憶おぼえし物數寺ものかずでらの心こころから此道このみち

の名で、あつた。暮れ時を聞きたい時である。▲此時に、何、入る。▲前
と思ふ。元節に七十歳ばかりの老内が、緩い身振で、疲勞し、睡みよ。も
籠中。此暇に上手な者があつた。さう差して来て、仕舞の能刀、少から
折敷の成分、氣味、流石の箱根の、減退せられた此の意味から、朝
着の實況に、と籠に乗りながら、この、は誰が、が、良いと思ふ。▲又、箱根の
りつを、その眼を聞くことが出来た。外出は感得を、引くと言ふが、著、物さ
既に是れを、聞くさ、背趣へ、破れた。身置きの間に、足氣が立つて、不可め
るのに、老親さん、は、非常、に、好い聲、からよく、拭いて、きんさん、に、服、

非常に好い氣分で聞くうちにも
鉛筆と紙を擦りて大

諸譜に寫し、ピアノに因つて一の調
 明前を作り上げ、是れも凡八ニ共
 に近き、故に一世の批評を誦ひ、
 いと思つて居る。茲にも和声調和
 の樂の材料として、隨かに價値あるも
 のを思ふ所にて、能く其の樂を奏
 酌研究し、理想調和の調和樂を作り大
 にしては、國の大小にしては家庭の詩

天

雄辯の毛氈、父の机掛、土呂廳
 評、何れも實生活の内に居る
 距離が如何なる生活の果、
 評、非非徒然
 難を賣かままでの子供、
 評、一服や、いかにある

次 の 題 (川柳)

佛

① 大 師
 ② 大 師

獄舎の子供

恐しい周囲の力

熊舎の規則として女園が子帳を生む一箇年間は母親につけて乳を飲ます事を許さないのである。

●小鯉様 五才半の小鯉、驚き出た股から尿を小便に流し替へて、一呼吸して再び水をかき水はねた。金糸に輝いて横たうる魚の太

な景色や人を見て火のつくやうに泣き出します乳児たちは補色の獄

▲普通の著物　著たる人
を見るに怖いものでもあるかのやうに思つて仕舞へ泣き悲しむのです。かうした事が原因となつて機織り等が一旦、紙を出た後も世上一般の清潔な遊戯なきを見て

ふ事です實に變業の間の教育が大切であるのを思はずにはゐられま

[illegible]

筋肉も又緊張して之から仕事に
 取掛からうと云ふ熱力の充實した

時である。其時に出向く入るに筋
肉が緩み、身が疲勞し、睡まで
知差して來て仕業の能力が少から
ず減退せられる此の意味から朝
下は避けるが良しと思ふ。又浴後の
外出は腰背を引くと言ふが骨格と
身體との間に濕氣が立つと不可
からよく拭いてきちんとした服を

日報柳壇

難振の天庇父の机掛 土呂嗣
 紙簾が雄鷹にさす泉の飛岩 仙
 難を賣うまでの子供 臨戸 鳥石
 次・の題 (川豊)

◎車

◆小鰯こいわ 五寸すんの小鰯こいわの鱈たらを油あぶらに
腹はらをひらき、鹽しほを口くちに水みづにて洗あらひ、乾ぬか
し一時ひととき間まばかりして再び水みづをなかけ水みづ氣き
たけき金かね市いちに刺さして焼やき、人ひとを驚おどかす大おほ

[illegible]

敬 弔

敬 弔

三井物産株式會社

淺野セメント株式會社

京 城 出 張 所

淺野スレート株式會社

京 城 出 張 所

ノチア
トーレス

京城黄金町 長電話六六番

春の洋装のお仕度は是非其當代代理部へ御川命下さい
各種合服地の兄本御申越次第送呈致します

擦緞各系七セ
種ル

背廣三編
詰襦上下
オビコート
トロンビ

其外綵仕作任置服紳婦人コート色々

京城天平通 京城日報社代理部
電話六〇〇九番・振替京城三〇〇番

京都明町一丁目五光町電話二一七番

皮膚科 皮門科
瘡癤痔瘻 疥癬濕疹 梅毒淋病 梅毒淋病

入院隨時診察夜九時〜④

佐藤病院

[illegible]